

9月15日 占い

大学を出てすぐに、先輩から誘われて京都のある私立高校に勤めることになった。野球部は甲子園の常連、その他の部活動も全国大会で優勝するような有名男子校であった。私はその頃新たに作られた中等部に配属され、中学生と、一部高校生の授業を担当することになった。中等部は特進クラスで京都の老舗のボンボンがたくさん通っていた。「先生、昨日うちのおとうはんが、こんなこと言わはってん」。教室にははんなりした京言葉が溢れていた。

私は、7月に教諭にしてもらえる約束で就職したのだが、一向にその心配がない。夏休みに入る前、心配になって管理職に尋ねると、「君は大学の成績が良くないので、もうしばらく様子を見させてもらう」と言われた。そんなことは4月の段階でわかっていたはず。頭にきて大学の就職課に相談に行った。担当者曰く、「それって、口約束だよ。じゃあどうしようもない」。ロボットのような対応にこれまた頭にきた。

ただ、周りの先生方は本当に良い方ばかり。生徒もかわいい。途中で投げ出すわけにはいかなかった。年度末、ある先生から「愛川さん、もう1年頑張ったら教諭にってもらえるように管理職に話をつけたから」と言われた。正直うれしかったが、これも口約束。私は「兵庫県で、公教育に携わりたいので」と断った。

ある先生が、落ち込んでいる私を心配して、飲み連れて行ってくれた。老夫婦が営む落ち着いたスナックだった。「愛川さん、このママの占いはよく当たるよ。占ってもらい」。言われるままにメモ用紙に名前を書いた。字画を見ながらママさんが「あなたは若い頃苦労するけれど、年々良くなって、大成するよ」と言った。人に裏切られ、誰も頼ることのできなかった私に、それはこの上ない言葉だった。私が大成するなんて何の根拠もない。けれど、勇気がわいてくる言葉だった。

後日、友人にその占いの話をしたところ、「そんなんまやかしゃ。誰だって若い頃は苦労するもんや。年を重ねたらそれなりに生活も安定するし」。なるほど、その通りかもしれない。しかし、私は間違いなくそのとき救われた。それは、私にとって魔法の言葉だった。

